

エッセイ：フランス・田舎暮らしの日々

Essai : La vie à la campagne dans un petit village

木下 恵美子

KINOSHITA Emiko

Abstract : Quand je vivais sur la côte d'azur avec un monégasque, nous avions une villa à Saint Cezaire sur Ciagne, petit village provençal où les habitants cultivent essentiellement des oliviers.

Un jour, au marché, j'ai rencontré Colette, une femme très gentille, artiste peintre très naïve qui exposait ses oeuvres.

L'un de ses tableaux m'a vraiment plu. De plus, sa façon naturelle de me recevoir m'a touchée. Nous avons parlé de nos vies si différentes. C'était très enrichissant.

Après cette première rencontre, je suis allée souvent dans son atelier où, à partir de ses dessins eux-mêmes, j'ai appris la cuisine provençale. J'en ai gardé des souvenirs inoubliables.

Keywords : Monegasque, Provence, village, marché du matin
モナコ人、プロヴァンス、村、朝市

このエッセイは当時、私が暮らしていたフランスの田舎での日々について書いたものです。

その頃、同居していたモナコ人の彼と時々、モナコを離れてグラスから 20 km 位の小高い小さな村の、オリーブ畑の中にある古い石造りの家で生活を楽しんでいました。

その時に出会った村の人々とのお付き合いは、今でも深く心に残る素晴らしい思い出です。

私達がこの村に時々暮らすようになってから、ずいぶん色々な人達との出会いがありました。

ここ、サン・セゼール (Saint-Césaire) の村の人口は僅か 2,500 人。古くからオリーブの栽培が盛んで、多くの人達は石造りの昔からの家で、何世代も続く農家の伝統を守る暮らしを営んでいます。私達は村から少し外れた広い敷地の田舎家で、のんびり過ごすのが最高の楽しみでした。

勿論、家の周りにはオリーブ畑に囲まれ、果物、野菜なども自家製の物を満喫していました。

そんな暮らしが続く中、村人達とのつながりも少しずつ深まっていきました。

我が家にもオリーブの木が70本ほどあるので、毎年、村の搾油所でオイルを絞ってもらっています。塩漬けオリーブの味も最高で、採取の時期には村の人達の助けを借りて何日間か作業をします。村のオリーブオイルの味のコンクールなどもあり、地元の人達の農作業も活気があふれています。そんな中で村のオリーブオイル搾油所の責任者、ジョン・ピエール（Jean-Pierre）には、畑の管理や手入れなどをお願いしてずいぶんお世話になりました。彼は毎日忙しいのにもかかわらず、朝早くから働いてくれました。無口で愚痴などをこぼすこともなく、もくもくと作業に専念する姿に、土と共に生きる頼もしい存在だと感動しました。

このような日々の暮らしに少しずつ溶け込んで、村の人達とのお付き合いも笑顔で出来るようになっていき、広場のカフェで仲間入りをすることも度々でした。何しろ小さな村なので、周りの人のうわさをあれこれおおげさに、身振り手振りで話しこんでいるのによく出会います。

その仲間の一人になって、私も時々話に引き込まれていくこともありました。そして、今までに出会ったことのない村人のイメージがいつの間にか自分の頭の中に作られていったのです。

そんな中で、コレット（Colette）さんの事は、近所の人がよく話題にしていたので、彼女の存在がとても気になっていました。この村に住んでいるアーティストの一人として評判も良く、一度は会ってみたいとひそかに願っていました。

ある土曜日いつもの様に、村の広場で行われている朝市に出かけて行きました。夏には、ヴァカンスを楽しむ多くの人達で、マルシェは大賑わいです。活気ある朝のひと時に出会う人々とのやりとりもとても親しみを感じます。プロヴァンス地方の特産物もいっぱい、自家製のチーズやオリーブオイル、新鮮な野菜や果物が山積みと並べられています。

マルシェで顔が合えば、誰にでも「ボンジュール」の声がはずみ、そんな雰囲気にとっぷりつきながら、私もあれこれ眺めて、せっかく来たのだから何か一つぐらい買いたいと思い、狭い朝市の通路を行ったり来たりしていました。

その時、いきなり私の目に飛び込んできた物があって、そこにじっと立ち止まり見入ってしまいました。それは、ちょうどはがきほどの小さな「かわら」に描かれたプロヴァンスの家の窓の絵なのです。このあたりでよく見かけるごく普通の光景ですが、伝統を守る古い田舎家の雰囲気から、そこに住む家族までが目に浮かんでくるようで興味がわきました。窓上から咲き乱れる藤の花、窓下の部分の花柄の白いレースのカーテン、緑の色あせた木製のよろい戸、窓辺のゼラニウムの鉢植え、そして、庭には石のベンチを飾るいくつかの鉢花など、この小さなかわら絵が、まるでどこかの家の前にたたずんでいるような実感をともなって目に飛び込んできました。私は一瞬、不思議な錯覚に陥りじっとそこにとどまっていました。

細い絵筆でひとつひとつついでいねいに描かれたこの絵に心を奪われ、かわらを取り上げて、何気なくうら返してみると、そこには何とコレットさんのサインがしてあるのです。私がこの村でいつかは会いたいと願っていた彼女のアートが目の前に現れて、とても嬉しくなっていました。そして、ふと顔をあげると、メガネをかけたなんとも素朴な感じ

の女性が、「このかわら絵、気に入ってくれた？」と私に声をかけてくれました。「コレットさんですか？」と聞き、お互いの目が合い急に親しみを感じました。「この村で生まれ育ち、田舎者の私だけれど、絵を描く情熱は誰よりもあるのよ。」と言いながら、私達の出会いの記念にと、このかわら絵をプレゼントしてくれました。私は「Merci!」と何度も繰り返しながら、優しい笑みを浮かべる彼女にお礼を言い続けました。何の飾り気もなく話し方もおだやかで、私がこれまでに会ったフランス人とは違う自然な素朴さを感じました。

この出会いがきっかけで、私はコレットさんのアトリエに時々足を運ぶ様になりました。薄暗い古い石造りの小さな家の一隅で、彼女は毎日毎日絵筆を握っています。そこで話をする度に、コレットさんの人柄のすばらしさに心を惹かれていきました。決して、自分の力に溺れることなく、こつこつと地味に生きている姿に感動してしまいます。

彼女はしっかり自然に溶け込んでいて、どんな片隅の野生の小さな草花も生き生きと表現し、私たちに新しい発見をさせてくれるのです。薄明りの電気スタンドの光にもかかわらず、コレットさんのアトリエには、何とも言えない温かい雰囲気漂っています。あたりは、彼女の手書きの季節の小さな花で彩られた食卓のセラミックがところせましと置かれています。それらに手を触れると、大事に使ってと言わんばかりに自分の中に溶け込んでくるのです。

これこそ、コレットさんの全ての作品に心がしっかり込められているからだと思いました。

私は、今日もつい、アトリエに足が向いて、かわら絵に取りかかっている彼女の細い絵筆の動きに目を奪われるのでした。何気なく自分の絵心を語りながら、その飾り気のない生き方がぴったりだと思いつく感じがしました。こんな小さな村でのふとした事からの素晴らしい出会いを、いつまでも大切にしていきたいと自分に言い聞かせました。

ある日、彼女のアート生活について、コートダジュールの地方新聞「ニースマタン」に大きく記事が掲載されました。その後、名前が知られる様になり、今はこの狭いアトリエに三人の生徒を持つコレット先生ですが、「私みたいなものが、人に教えるのは・・・」と、ラヴェンダの小さな花びらに絵付けをしながらはにかんでいるのでした。

その後、何とコレットさんの個展が村役場で行われ、たくさんの反響に、彼女の創作活動にますます力が発揮される様になりました。小さな村のかけがえのない存在の一人です。

私は、今でもこのかわら絵に毎日話しかけて、当時の大切な出会いに喜びを感じています。

コレットさんのかわら絵



村のオリーブ畑

